

中嶋 嶺雄さん(国際教養大学学長)



現在、文部科学省中央教育審議会の大学分科会では一我が国の高等教育の将来像」についての検討が進んでいる。すでに「審議の概要」は公表されており、最終的なまとめないしは答申に向けて精力的な討議が行われているのだが、その原案のなかには高等教育の歴史についての記述があり、19世紀のフンボルト大学の社会学者クラーク・カールの大学論にいたるまで、欧米の高等教育の発達史が書きこまれていた。私はそれに対して異議を申し立てたのだが、それは欧米の高等教育の歴史は重要であるが、わが国自身の高等教育の歴史も書くべきで、それには秋田県が生んだ偉大な東洋史学者・内藤湖南が京都帝国大学において果たした重要な役割や、その内藤湖南を京都帝大に招いた

日本の教育における秋田と信州



なかじま・みねお 1936年長野県松本市生まれ。東京大学大学院修了、社会学博士。95〜01年東京外国語大学長。カリフォルニア大学客員教授などを歴任。現在、文部科学省中央教育審議会委員(大学院部会長・外国語専門部会長)。(サントリイ学芸賞)、「国際関係論」など。03年度「正論大賞」受賞。

政治、行政の負い目に奮起

たばかりか、人文学に優れた伝統を有する京都帝大の基礎を作った秋田県人・狩野亨吉の貢献を抜きにして日本の高等教育の歴史は語れない、と日頃から考えていたからであった。

内藤湖南はその名のとおり、十和田湖の南の毛馬内に生まれ、秋田師範学校を卒業した。今日の鹿角市の出身ということになるが、「鹿角学」ともいえる儒学の伝統と学风が湖南を育てた秋田の奥地に根付いていたのである。その内藤湖南に注目して京都帝大に招いたのが大館

市出身で第一高等学校長から京都帝大文科大学長になった狩野亨吉であった。

このように秋田はわが国の高等教育の歴史において大変な逸材を生んでいるのだが、私の故郷である信州も、高等教育の歴史には欠かせない人物を数多く生んでいる。松本藩士の子弟で明治4(1871)年に創立された文部省の次官として信望を集め、一時は東京外国語学校(現東京外国語大学)の校長を務めた辻新次を抜きにしてわが国の文部行政を語るわけにはいかな

いが、同じ信州からは高遠藩士の子弟であった井沢修二が出ていた。井沢は日本の音楽教育の創始者として名を残し、とくに小学唱歌を確立した功績で知られ、音楽学校(現東京芸術大学)の初代校長にもなっているが、一時は台湾にも渡って今で言う中国語の字音や音韻の研究にも業績を残している。

ではなぜ秋田と信州なのだろうか。信州人が教育に熱心であり、教育者や学者が数多いことについては、私は従来から次のような仮説をもっている。それ

は明治維新の時期に信州はいわゆる薩長土肥の諸国のように政治や行政のリーダーを出すことが出来ず、徳川時代以前にも時代の主役にはなれなかった。甲斐の武田勢と越後の上杉勢との川中島の合戦にも見られるように、所詮は戦場でしかなかったのである。内藤湖南の出身地は元来南部藩に属し、秋田県人としてのアイデンティティーには欠けるのかもしれないが、いざれにせよ戊辰戦争での会津藩のように時代の一方の担い手であったわけではなく、信州も秋田も政治や行政での負い目を教育に賭けることによって克服しようとしたのではなからうか。このような共通性を秋田に来て再発見したのであるが、このところ信州は、信濃教育の名が惜しまれるほど教育、とくに高等教育では隣県の静岡県や富山県に比しても大きく立ち遅れてしまっている。この点で秋田は、国際系大学(現国際教養大学)の設立をめぐっても世論を二分するような論議があったというほどに、高等教育についても県民が真剣に考えているのではないかと私は思っている。